

セン測度（センの貧困指数）を読むー

社会の貧困はどのように把握できるのだろうか。

貧困や不平等を把握するための測度（指数）にはいろいろあるが、一つはその社会の人々の所得のばらつき状態から把握する「記述的」な測度（ジニ関数、標準偏差など）である。もう一つは所得や財などから得られる人間の心理的な満足感である「厚生」が不足した状態を貧困や不平等と考えて、その不足度から測る「規範的」な測度（セン測度、アトキンソン測度等）である。

後者が社会的厚生関数によるアプローチだが、その研究は所得分布から社会的厚生の不足を示す関数関係を構成し、この中で公理分析の手法を採用する。公理分析とは貧困のどの様相に重点を置くべきか、極貧層や相対的に豊かな貧困線に近い層のうち、どの層をどれだけ重要視して測るのかといった「規範性」や視点を明らかにして、その「規範性」や視点が貧困度の値にどのように影響しているのかを分析する手法である。

二つの形式の測度は、共に所得に関する社会調査の集計から導かれるので、この集計方法の研究が貧困測度や不平等測度の研究である。

① 相対的貧困と絶対的貧困の関係

まず絶対的貧困とは生物学的存在としての人間の生命維持に必要な衣食住の経費を軸とする貧困線であり、「健康やその他の需要（衣服、住居等）から国民経済等の水準とは無関係に決まる動かしがたい水準¹」を貧困線としてそれ以下の所得状態を指している。

20世紀を目前にして、ブースらによってロンドンで初めて科学的貧困調査が行われ、この調査に影響をうけたローントリーはヨーク調査を行っている。彼は必要カロリー量から食糧費を計算し、更に諸経費を積み上げて最低生活費としており、この貧困線は生活保護、公的扶助の保護基準のルーツであった。

これに対して相対貧困は、戦後復興なった1970年代になり、P. タウンゼントによって「貧困な人々の生活資源は、平均的な個人や家族が自由にできる生活資源に比べて極めて劣っているために、通常社会で当然とみなされている生活様式、習慣、社会的諸活動から事実上締め出されて（deprived）いる²」と指摘されたものである。相対的剥奪（relative deprivation）と言う視点によって輪郭を明らかにされた新しい貧困であり、豊かな社会内部の貧困として定着を見ている。相対的貧困は、その集団の平均的水準と言う「他者との比較」によって問題となる点で、その本質は格差、不平等問題であり、比較するその社会の平均的水準に影響をうける貧困として、個人の所得額だけでは捉えきれない貧困である。

豊かになった先進諸国では生物学的な生命維持は果たせても、人にはその生活が社会の平均的水準とかけ離れている時に、近隣とのつきあい、求職活動などの社会関係を営む上

¹ 阿部 實 「公的扶助論」1章 P47 中央法規 2006年1月

² 同上 P72

でハンディが生じて「貧困をもたらす無気力状態」が指摘され、この「質的なものを視野に入れた」新しい貧困が「相対的貧困概念」である。

人に無気力状態をもたらすという相対的貧困の定義は、貧困が人の生きる意欲、人の本質である思惟し社会行動をする力を奪う社会問題である事を明らかにしていると言えよう。

② センの貧困測度

上記二つの貧困概念は貧困全体をどのように形作っているのか、これらの概念の間の関係について、アマルティア・センの貧困測度（指数）の構造を通して考察したい。

セン測度と言われる貧困を測る指数（関数）は、それまで多用されていた**貧困者比率（貧困率）**と**所得ギャップ比率**の二つに加えて、貧困者内部の**ジニ関数**（均等分割線は貧困線）が組み込まれている。**ジニ関数**が含まれている点で、セン測度は伝統的な二つの測度では捉えられなかった貧困者内部の格差、不平等を捉えている事が分かる。

前の二つの測度、貧困率では全体の何%の人々が貧困状態なのか、所得ギャップ比率では貧困層の所得は平均してどれだけ貧困線を下回っているかを捉えているが、これらの測度は、いわば貧困者全体を集団として捉えていたと言えよう。

これに対してセンの測度は、これら二つの測度では目を向ける事が出来なかった貧困者内部の様相、貧困線付近にいる人と極貧者との格差、個別的な状況に注目して、貧困者の中を最も貧しい所得層に向けて所得域毎に階層別に区分けしている。そしてより貧しい階層に向けて高い順位を付し、その順位を実際の階層人数に掛けて集計する。この手法により、より貧しい極貧層の人数が、その社会の貧困度をより大きく押し上げる事ができる。

この手法は鈴木興太郎 後藤玲子『アマルティア・セン 経済学と倫理学』では「公理 R（序数的ランクによる重み付け）」として説明されている³が、セン測度は「貧困と不平等と言う相互に関連してはいるが異なった二つの関心を統合する最初の試み」⁴とされ、相対的貧困（剥奪）と絶対的貧困の関係を数理的に明らかにしている。

③ セン測度を読む

結局センの貧困測度は以下のように纏められる。

センの貧困測度（このジニ関数均等分割線は貧困ライン）

$$P \text{ (貧困の度合い)} = \frac{H(I+(1-I) \times \text{貧困者内部のジニ関数})}{\text{H (貧困率)}}$$

$$P \text{ (貧困の度合い)} = \frac{HI + H(1-I) \times \text{貧困者内部のジニ関数}}{\text{H (貧困率)}}$$

$$H \text{ (貧困率)} = \frac{\text{（貧困線以下の人数）}}{\text{（全人口数）}}$$

$$I \text{ ギャップ比率} = \frac{\text{（貧困線 - 貧困者所得の平均）}}{\text{（貧困線）}}$$

³ 鈴木興太郎 後藤玲子 『アマルティア・セン—経済学と倫理学』 P224 実教出版
2005年11月25日

⁴ 同上 P223

この式を展開すると、 P (貧困の度合い)とは一つは HI 、そしてもう一つは $\{H(1-I) \times$ 貧困者内部のジニ関数 $\}$ の二つの項に別れ、貧困度はその和である。

前項の HI は (貧困率 \times ギャップ比率) であり、個人の所得額のみを問題として測る貧困の広がりや深さ、主に絶対的貧困の部分と考えられる。

後項の $\{H \times (1-I) \times$ 貧困者内部のジニ関数 $\}$ がジニ関数の関与する部分で、貧困線と個人の所得の双方の値を問題とする貧困者内部の格差、相対的貧困が反映される部分である。

後者の項で貧困率 H に掛けられる $(1-I)$ は、 I (ギャップ比率) が 0.8 (80%) と大きい貧困が深い場合に 0.2 であり、 0.1 (10%) と小さく貧困が浅い場合に 0.9 である。

貧困が深い、 I の大きい社会ではジニ関数が関与する相対的貧困の部分は抑えられる一方で絶対的貧困部分 HI は膨張して貧困全体を押し上げる。貧しい国の貧困の様相である。

反対に貧困の浅い、 I の小さい社会では、貧困の中に占める相対的貧困は $(1-I)$ が大きいので、貧困者内の格差 (ジニ関数) や貧困率が大きい場合に貧困度を押し上げる。一方で絶対的貧困部分 (HI) は抑えられる。豊かな国の貧困の前面に出るのは相対的貧困である事が示されている。なおジニ関数が 0 の平等な社会では相対的貧困は 0 である。

この構造をみると、貧困とは絶対的貧困と相対的貧困を併せ持つ状態である事が分かる。また絶対的貧困は生存を維持する絶対量を軸として大きくは変化しない量だが、相対的貧困はその社会の貧困率や貧困ギャップ比率、貧困者のジニ関数の変化、その動向によって伸縮する事象であり、社会の所得分布の変化によりモジュール的に伸展して絶対的貧困を覆い、あるいは露出させるという事になると理解される。

その事は、絶対的貧困、相対的貧困という二つの貧困概念は、互いに明確に切り分ける事が出来ない、その社会の貧困者比率、貧困ギャップ比率、貧困者の所得格差の変化により、互いの重なり合いを変化させる、重なり合った概念であると理解される。

iv) 貨幣的ニーズと非貨幣的ニーズ

上記絶対的貧困への政策は、いわゆる貨幣的ニーズへの対応として、金銭給付 (所得保障) や、食糧、衣料、住宅などの生活財の現物給付となろう。一方の相対的貧困への政策は、いわゆる非貨幣的ニーズへの対応として、福祉国家政策を特徴づけた対人社会サービス体系 (保健医療福祉・介護・保育・家事援助サービス・就労サービス・職業教育・教育サービス等) となろう。

現在の福祉国家の対人社会サービスは、各々の制度が独立的に実施体制をもっているが、上記二つの貧困の構造的な理解を踏まえれば、絶対的貧困に対する所得保障制度と相対的貧困に対応する各種対人社会サービス提供は混然一体的に行われる事が求められていると思われる。人間の社会生活、そのニーズの統合性からも自然な構成であると思われる。

この構成が継続的に実効性を確保できる貧困政策の在り方と考えられる。